第 40 回　高畠ゼミ OB/OG 会読書会　　2012．7.20　　報告者：佐藤　健人
『統治二論』ロック　　『ヨーロッパを見る視角』阿部謹也

GHQ 草案の当初の訳文では、「People」を「人民」としていたが、松本と佐藤はそれをやめて、本質的に保守的な用語である「国民」という用語を採用した。「国」と「人々」を表す二つの漢字で書かれる「国民」という言葉は日常用語であり、人々が溶け合って国民（nation）になるという意味を持っている。～
「日本人」や「大和民族」と本質的には同義語であった。
ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて下』P 162

今回のテキストはロック『統治二論』と阿部謹也『ヨーロッパを見る視角』の 2 冊を選びました。
私は 1690 年に出版されたロック『統治二論』を 2012 年にはじめて通読しました。ロック『統治二論』の最善の読み方は訳者――訳文は読みやすく、解説も丁寧です――が言うように「ロックの意志や意図を無視して、この作品を内在的に解読する方法はおそらくないから、ロック自身が読んでほしいと願ったように読むこと」なのでしょう。
ということは、敬虔なクリスチャンでもなく信仰する神をもたない私には正読することはむずかしいことなのかもしれません。でも誤読を懼れずにわたしは私流に読み解きたいと思います。
阿部謹也『ヨーロッパを見る視角』は再読です。ご存じのように阿部氏には『世間論』」に関係して日本とヨーロッパについて比較・検討した膨大な著作があります。その中から今回『ヨーロッパを見る視角』を選んだのは阿部氏のヨーロッパを内存的に理解しようという視角の方法を採りたいと思ったからです。
というわけで今回はこれまでとは些か趣きは異にして、ロック『統治二論』は私なりに読み込み、阿部謹也『ヨーロッパを見る視角』は作者に寄り添いながら読む、というアクロバット的な読み方で 11～12 世紀にヨーロッパで発見された＜個人＞（阿部氏）は 17 世紀末のロックにどうつながっているのかをレポートしてみたいと思います。
＊ロック『統治二論』については前回の報告者工藤氏の長大なレポートがあるので、今回は私流の読書メモを参考までに添付します。

『ヨーロッパを見る視角』　　阿部謹也　　岩波セミナーブックス５８

第 1 講「世間からの離陸」
ヨーロッパを見る二つの視角
1）先進地域としてのヨーロッパから学ぼうという姿勢
日本の国や社会をどうしていくべきかという関心・問題意識から

先進的な近代資本主義社会をつくりあげたイギリス、そして社会思想、その他の芸術・文化の面で新しい、例えば自由・平等・博愛の精神を生んだ国としてのフランス、それらと比べるとやや後進国ではありますが、遅れて近代化を果たした国、日本から見ると非常に近くに見える国としてのドイツ、等々が問題になったわけです。
『ヨーロッパを見る視角』P 5

明治以来日本の知識人はヨーロッパに憧れを抱きつづけてきた。知識人の目に映ったヨーロッパはフランス革命の後、自由、平等、博愛の理念を社会制度として実現した文明圏であり、近代市民社会が実現された地域であった。近代市民社会の淵源は多くの人々によって中世都市にあるものと考えられ、自由都市のイメージが作られていっ

た。平等な市民が構成するひとつの社会が封建制のただ中で生れたことこそ、近代市民社会の出発点であったとかんがえられていた。このようなイメージは今でもかなり根強く残っている。　『近代化と世間』Ｐ39

２）現実のヨーロッパとの交流・つきあうための関心・問題意識

これから共に暮らしていかなければならない地球上の一つの仲間の文化圏としてヨーロッパを見ると、ドイツやフランスよりもナポリが大事だという話にも当然なる。

『ヨーロッパを見る視角』P6

＊視角のポイント

両者の社会の先進や後進を問わずに、内存的に理解する

これまでのヨーロッパ史研究、あるいは日本の近代史研究、現代史研究は、日本の社会を前提にしてヨーロッパの社会との比較を行ってきたと思いますが、私は日本の社会というものに疑問符を付するところから始めたいと思っています。つまり、日本の社会はヨーロッパと等質な社会であるという前提には立たないということです。さらにまた等質な社会ではあるが比較的遅れた社会であり、ヨーロッパのほうが先進的な文化圏であるとみる立場にも立たない。ある意味で、日本の社会はヨーロッパとはかなり異なった特質をもった社会だという前提から、まず日本の社会の特質を踏まえてその分析をし、その結果を踏まえてヨーロッパを見直す。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ7

私のヨーロッパ論は､現在の日本とヨーロッパがかなり異なった文化をなしていることを認めた上で、日本とヨーロッパの違いを具体的な事例をあげて調べていき、そこから時代を遡って共通の根底にまで辿り着こうということになるわけで、それが基本的な方向だといってもいいかと思います。十一世紀以前のヨーロッパは基本的に日本と異なった社会をつくっていたわけではない、という前提から出発しているわけです。

『ヨーロッパを見る視角』P14

日本の社会が現在のヨーロッパ諸国の社会とどこが決定的に違っているのかというと、一番大きな違いはヨーロッパ風の社会が日本には部分的にしか成立していないこと、そして古来、世間という独特な人間関係が支配的であった点にあると思います。つまり日本とヨーロッパのどこが違うかを象徴的に示しているのが、社会という言葉がどこまで浸透しているかということにあります。この点については、これまでの社会史学者や社会学者の扱い方には問題があったと思います。社会という概念が日本とヨーロッパと共通だという前提から出発して論じているからです。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ15

そういう世間と社会との関係は明治の頃から始まっていますが、社会という言葉は文章用語として定着し、インテリ、学者、知識人、マスコミ関係者の間では、文章の中では使われますが、日常会話の中では、演説や講義や新聞記事以外では、まず使われていません。　『ヨーロッパを見る視角』Ｐ25

ダブルスタンダードの近代化

日本の社会は明治以後に欧米化したといわれている。欧米化とは近代化という意味である。近代化によって日本の

社会は国の制度のあり方から、司法や行政、郵便や交通、教育や軍事にいたるまで急速に改革された。近代化は全面的に行われたが、それが出来なかった分野があった。人間関係である。親子関係や主従関係などの人間関係には明治政府は手をつけることが出来なかった。その結果近代的な官庁や会社の中に古い人間関係が生き残ることになった。

『近代化と世間』Ｐ92

明治１０年（１８７７）に英語のソサイエティが社会という言葉に翻訳され、明治 17 年にインディヴィデュアルが個人という言葉に訳された。しかし訳語が出来ても社会の内容も個人の内容も現在（２００６）にいたるまで全く実質をもたなかった。

西欧では個人という言葉が生れてから九世紀もの闘争を経てようやく個人は実質な権利を手に入れたのである。日本で個人と社会の訳語が出来てもその内容は全く異な

ったものだった。なぜなら日本では古代からこの世を「世間」と見なす考え方が支配してきたからである。　『近代化と世間』P92

こうして日本の社会は二つのシステムが共存するダブルスタンダードの社会となったのであり、その状態は今も続いている。

『近代化と世間』P95

＊阿部氏はとても興味深く、注目すべきことを指摘しています。

・十一世紀以前のヨーロッパと日本の社会は異なってはいない。
・現在の決定的な違いは日本にはヨーロッパ風の社会が部分的にしか成立していない
・社会という概念が日本とヨーロッパは共通（等質）だという前提から出発して論じている。
・社会という言葉は文章用語として定着し、日常会話では使用されていない。
・日本は「世間」という独特な人間関係が支配的であったし現在でもある。
・個人は九世紀もの闘争を経て実質的な権利を手に入れた。
・ダブルスタンダードの近代化（社会と世間）が今も続いている。

『世間』

われわれには大変便利な「世間」という言葉があります。～『万葉集』から今日までこの言葉は消えることなく使われています。そしてその意味は、現在とそう違わない形でさまざまな文章に使われて今日にいたっています。～そういう仏教用語の分析をしてもあまり意味がないのは、日本人が世間という言葉を使って表現しようとしてきたものは、今でもかつてと同じように人間と人間の関係の世界だからです。世間という言葉は、誰でも使っています。そして世間を知らないという人は、大人には一人もいないでしょう。社会という言葉について説明しろといわれればロごもってしまう人でも、世間を知らない人は、少なくとも大人には一人もいない。

『ヨーロッパを見る視角』P15～16

ヨーロッパの学問は、基本的には言語と記号と数字から成り立っているといってもいいと思います。したがってわが国も明治以来その言語と記号と数字から成り立っているヨーロッパの学問を搾取して、それで日本の社会を分析しようとしてきました。しかし、日本には古来、言葉や文字で表せない知恵というものがあった。

『ヨーロッパを見る視角』P17

世間の定義

あえていえば個人と個人を結びつけている人間関係の絆です。そこには入会規則もなければ会則もなくて自然に生れているもの、誰がそこに入っているかどうかも自ずからわかるという仕組みです。　『ヨーロッパを見る視角』P17

世間のルール

1）長幼の序

年上の人が重きをなす

2）贈与互酬関係

「世間」の中には自分が行った行為に対して相手から何らかの返礼があることが期待されており、その期待は事実上義務化している。例えばお中元やお歳暮、結婚の祝いや香典などである。重要なのはその際の人間は人格としてのそれらのやりとりをしているのではないという点である。贈与・互酬関係における人間とはその人が置かれている場を示している存在であって、人格ではないのである。～

贈与の場合それは受け手の置かれている地位に送られるのであって、その地位から離れれば贈り物がこなくなっても仕方がないのである。

『近代化と世間』P96

3）義務

葬祭に参加する義務

４）共通の時間意識

「世間」の中には共通の時間意識が流れている。日本人の挨拶に「今後ともよろしくお願いします」という挨拶があるが、これは日本特有のものであって、欧米にはそれに当たる挨拶はない。なぜなら日本人は「世間」という共通の時間の中で生きているので、初対面の人でも何時かまた会う機会があると思っている。しかし欧米の人は一人一人の時間を生きているので、そのような共通の時間意識はない。

これと関連して日本では「先日は有難うございました」という挨拶がしばしば交わされる。しかし同じ挨拶は欧米にはないのである。欧米ではそのときのお礼はそのときにするものであって、遡ってお礼をいう習慣はない。

日本の「今後ともよろしく」という挨拶がお礼の先払いであるとすると、「先日は有難う」という挨拶は過去の行為に対するお礼の後払いということになる。

『近代化と世間』Ｐ97～98

５）差別的で排他的な組織

藤村の『破戒』の中で主人公被差別部落出身の丑松は「ああ、捨てられたくない。非人扱いはされたくない。いつまでも世間の人と同じように生きたい」といっています。この言葉は明白に「世間の人」というのは被差別部落ではない。被差別部落民は「世間の人」には入らないということを意味している。～

例えば宮崎勤という人がいますが、～マスコミ、その他、彼をめぐる世間というものが厳然としてあるわけで、その世間が彼を裁き、彼の親も姉妹も裁く。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ26

こういうことは（藤村「破戒」、宮崎勤の例）、長いこと日本の社会では行なわれてきたことです。これが世間の一つの特質で、個人の意思は大変その中では弱くて、人格の尊厳さえ全く認められていないのです。

ところが、ヨーロッパの社会では個人には尊厳があり、譲り渡すことのできない尊厳をもっているのが個人であり、その個人が社会をつくっている、少数意見であっても認めてもらえるという前提で社会がつくられているといわれています。そういう意味では、ヨーロッパの社会と日本の世間とは根本的に違うといえるかと思います。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ27

しかし、「世間」はまた差別の温床でもある。「世間」はどのような組織にもあり、それは自ずから差別的で排他的な組織となっている。～近代都市として生れながら、日本の都市は天皇との心情的結合を強調されて生れたために、郷土と変らぬ伝統的習俗の場として作られたのである。こうして「世間」は今なお義理人情の場として機能し、差別の温床となっている。「世間」の中で暮らしている日本人は「世間」の階段を昇るよりもその階段から滑り落ちないように心がけており、個人などはそこでは安住の場をもつどころではなかった。

『近代化と世間』Ｐ112～113

世間と社会

明治十年頃に「ソサイエティー」という言葉を訳すときに三十から四十の訳語が浮かんだのですが、～～世間という言葉はソサイエティーの訳語としては使われなかったのです。さすがに、明治の初期の人々は鋭い視点をもっていたと思います。どういうことかというと、ソサイエティという概念は世間とは根本的に違うからです。社会は個人がつくるものだということはヨーロッパの歴史の中で明らかにされており、社会をつくるのは個人であり、個人が集まって社会をつくる。したがって、どういう社会をつくるかはその個人の集合体に任されているとヨーロッパの歴史のなかでは理解されてきました。もちろん、中世にはそういう理解はありませんでしたから近代になってからですが、どういう社会をつくるかは個人の意志の総体に任されているのです。個人たちが集まってこういう社会をつくりたいと思えばつくれるし、変えたいと思えば変えられる。これが民主主義の根幹にあるわけですが、世間という言葉にはそういう意味合いは全然ないのです。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ24

つまり、世間の中での個人の位置は、ほとんどないに等しい。世間はある意味では与え

られたものであって、それを変えることはできないと考えられてきたのです。～世間の構造は不変であり、個人にはどうにもならないものだという理解があったと思います。

『ヨーロッパを見る視角』P25

＊世間と個人

・個人の位置は、ほとんどないに等しい、何となく、自分の位置がそこにあるもの。
・個人が自分からすすんで世間をつくるわけではない。
・世間の目が個人の行動を評価する最終的な場。
　・この関係の中には非人や乞食は入らない
・与えられたもので、変えることはできないと考えられてきた
・論理的に対象化できない性質をもっている
・体験で学ぶしかないものとして位置づけられてきた。
　形をもつ世間・・・・・会社、同窓会、学部、学会、趣味の会
　形をもたない世間・・・隣近所、賀詞交換、中元や歳暮を交換する関係

「個人」の誕生

明治 17 年に「インディヴィデュアル」Individual の訳語として「個人」という言葉が生れるのですが、それ以前には個人という言葉はありませんでした。したがって、個人という意識もなかったと私は考えます。一般の人々が、自分は個人だとは思っていなかったといえるのではないでしょうか。～現在のように個人が自己を主張できるような状況が生れてきたのはごく最近のことだといえるでしょう。

しかし、現在でも、わかりやすい例をあげると、A という大きな自動車会社の社員が自分の個人用の車に B 社の車を買って乗れるかというと、現実には乗れないのです。～これはヨーロッパと根本的に違う点です。

ある人は、日本人は「社畜」だといっています。「家畜」ではなくて、「社畜」です。そこまでいっている状況の中で、個人の尊厳があるとは到底いえないと思います。現在のように個人がかなり自己主張ができるようになっても、未だにそういう状況があるとすれば、それはどこからきたのかという問題です。それは日本の社会が実はヨーロッパやアメリカと根本的に違う側面をもっているからであって、それは世間という言葉に集約的に示されています。日本の個人は、今でも世間という枠の中で自己を主張できない状況が続いています。ところがヨーロッパは違う。そこがポイントです。

『ヨーロッパを見る視角』P27～28

さらに繰り返してこう語ります

日本の個人は大体企業の中に埋没させられています。～ある会社に入った人間は趣味まで、そしてまた選挙の際には投票する人間まで決められてしまう可能性があるわけです。自分の趣味は自分で決めるということは個人の人権の一部ですが、それができないために「社畜」という批判が出てくるのです。あるいは憲法は会社の門までしか及んでいないといわれたりするわけです。　『ヨーロッパを見る視角』　P77

＊個人について：ヨーロッパとの違い

・明治 17 年まで個人という言葉も意識もなかった、つまり個人は存在しなかった。
　CF. ヨーロッパ：個人は九世紀もの闘争を経て実質的な権利を手に入れた。
・日本人は個人の尊厳がない「社畜」
・現在も世間の枠の中で自己を主張できない。

『アイスランドサガ』

１１世紀以前のヨーロッパは基本的に日本と異なって社会をつくっていたわけではない。という阿部氏の独創的な視角・見解（！？）は私にはとても新鮮な驚きで興味深いものです。阿部氏は『アイスランドサガ』を題材にその内容を丁寧に語ってくれていますが今回は考察の対象ではないので割愛します。

１１世紀の「世間」からの離陸：決定的なポイントはキリスト教の普及

①個人の誕生

集団の中に埋没していた人々が一人一人、自分はこういう人間だとあるとき自覚し、あるいは職業の選択においても父親と同じ暮らしをしなくてもいいのだという可能性が出てくるといったことも含めて個人が生れたということで、それはそれまでの世間が壊れたことを意味します。　『ヨーロッパを見る視角』Ｐ50

②贈与慣行の変化

世間の役割の中で大きな役割をはたしてきた贈与慣行がこのころに一番大きな変化を被ったのです。それがヨーロッパが離陸できた最大の理由です。どうして贈与慣行が解体されたのかということです。この問題について考えるためには富の観念を見なければなりません。

＊「富」の観念

現代社会・・・経済力の源　（個人）消費の対象

中世社会・・・経済力の源　　分配・贈り物　人間と人間の関係＝家臣との絆

中世の騎士領主たちは、農民から公租として穀物とか富を受け取って、大きな宴会を開いてそれを再分配し、富を誇示しつつ、つまり、みせびらかしながらそれを消費し、贈り物をしていました。贈り物をすることによって、自らの対面を保ち、同時に家臣との絆を維持したのです。富とは人間と人間の関係を示すものでもあったのです。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ51

富を配れば、贈与慣行の社会ですからもらったほうはお返しをしなければなりません。しかし、貧乏人はお返しができないから奉公でお返しをすることになります。こういうかたちで、さまざまな労働力や武力をあつめることができた人間が有力者になったのです。こういう機能は今の日本にもあって、例えば派閥の領袖は、今の富は基本的にお金ですから、それを配ることによって派閥の絆を維持しています。～それは初期中世の社会とそう違わない時代の状況だと思います。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ52

キリスト教の浸透

十一世紀にはヨーロッパでキリスト教はかなり浸透してきていました。十三世紀になると、どんな村にも教会ができています。キリスト教はヨーロッパで大きな力をもった社会形成力になるわけで、教義のあり方も大きな力をもつようになります。アイスランド人も含めてゲルマン人たちは死後の世界を信じていました。死後の世界を信じているとはどういうことかといいますと、死んだあとも地上の富をもってあの世で暮らすと考えていたのです。したがって、死後の暮らしを安楽におくるためにたくさんの富、金銀財宝を地中海に埋めたわけで、これは大変な富の喪失につながっていたといえます。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ52

キリスト教は、このような慣習をやめさせようとしました。つまり、埋蔵財宝をやめさせようとしたのです。キリスト教の信仰では現世の富をもって暮す死後の毛会はありえないからです。その結果、財宝の埋蔵は行われなくなって、流通過程に戻ってくることになった。これが大きな転換となりました。どうしてそういうことができたかが、次の問題です。

初めは、キリスト教徒は乱暴な方法をとっていました。ゲルマン人たちが信仰の対象としている木を切ってしまう、あるいは泉を破壊してしまったりしたのです。先進的な地中海文明を背負っていたためにキリスト教は大きな支配力をもつようになったのですが、そのもとで贈与慣行の転換が行われたと考えられます。

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ53

ルカ伝の第 14 章～、この「さいわいになるであろう」の意味が問題ですが、これは明らかに当時のユダヤ人社会に贈与慣行が一般的に存在していたことを踏まえて、逆説的にイエスがイエス自身の彼岸信仰について考えを述べたものと思われます。つまり、現世の贈与慣行の中に神を介在させようとしたのです。乞食や貧乏人に施しをした場合には

現世のお返しは期待できないが、あの世でお返しがくるということだと、私は解釈しています。　『ヨーロッパを見る視角』P53～54

＊先進的な地中海文明を背負っていたキリスト教が、11 世紀にヨーロッパに浸透し、13 世紀になるとどんな村にも教会ができ、社会形成力に大きな力をもって、現世の贈与慣行の中に神を介在させ転換させた

公的な世界の成立

ヨーロッパでは十一、十二世紀に贈与慣行が転換されたために、二人の人間の関係に普遍的な尺度が入ることになったのです。つまり、二人の人間の「あげる」と「もらう」という関係の間に神が入ることになってのです。その関係には、死後の救済をかけた一人一人の霊魂がかけられていたわけですから、非常に大きな意味をもつことになります。いわば贈与慣行の転換の根底に、キリスト教の彼岸信仰があったのです。例えば修道院に全財産を寄進することによって、現世においては一切のものはなくなるが、来世において永遠の救いにあずかれるということは、深い信仰の結果として大きな意味をもったわけです。二人の人間の関係の中に、死後の救いを媒介にして普遍的な尺度が入ってきたときに、その社会は公的なものを成立させたことになるわけです。
日本の社会においてはそういうかたちの公的なものはありませんでした。日本の社会にあったのは、世間という関係でした。

『ヨーロッパを見る視角』P54～55

日本の場合は、贈与慣行はあらゆるところにあります。例をあげる必要がないほどいくらでもあって、さまざま関係の中に贈与慣行が今でも尾を引いていますが、ヨーロッパでは贈与慣行を整理してほんのわずかな部分だけ贈与慣行を認めながら、あとは全部教会を通じての彼岸信仰に収斂するかたちで贈与慣行を転換させたのです。そこで公というものが生れてきた、と考えています。この公が生れたときに、公的な世界が成立する。それ以後、ヨーロッパは日本的な、あるいは東南アジア的な贈与慣行の世界から離陸して、いわば近代社会へと走ることができたのだ、と私は考えています。

『ヨーロッパを見る視角』P55

十一世紀から十四、五世紀の間に、ヨーロッパにおける大教会は全部できています。～十五、六世紀になれば、宗教改革の結果、贈与慣行は教会からも消えていきます。

『ヨーロッパを見る視角』P56

第２講　個人の成立

日本人はどうしても日本人同士で固まってしまう。その理由の一つは、言葉が不自由だということがあります。言葉が不自由と言っても留学生ですからそれほどではないのですが、基本的にはドイツ人やフランス人やアメリカ人と一緒に共通の話題で話に興ずることが非常に苦手です。～要するに、外国人の中で一人になることに対するすごい不安が日本人にはあるのです。それは前回お話した世間の構造と非常に深い関係をもっています。

『ヨーロッパを見る視角』P６２

私は被差別部落の問題はそこから（世間論）説明できると今でも思っておりますが、そのときに関係者が自分たちは人権といってもぴんとこないので、「義理人情」といっている、これならわかるという話をされました。私は少し違うなと思いましたが、反論はしませんでした。義理人情というのは、世間の外にいる人に対して発揮される場合もないとはいえませんが、基本的には世間の中にいる人間関係の原理だからです。

『ヨーロッパを見る視角』P６７

個人と社会

日本の場合は不思議なことに個人というものが普遍的な概念として通用していると思われているようです。ヨーロッパと日本は同じだと何となくみなしているような気がします。しかしそうではないので、およそ個人といっても韓国の場合、中国の場合、日本の場合、アメリカの場合、それぞれ全くといってもいいくらい違います。

『ヨーロッパを見る視角』P71

個人は常に一人で、何者も彼を助けることができないという思想は、確かにヨーロッパの思想の原点にあることはあります。しかし、ヨーロッパはこういう思想を原点としながらも、そこにさまざまな工夫を凝らして近代の個人と社会の関係をつくりあげてきたわけです。～それが中世から近代にかけてのヨーロッパの歴史だと思います。日本の場合は、そういう苦労をそれほどしていないのです。　　『ヨーロッパを見る視角』Ｐ72

世間の解体

キリスト教の普及

マタイ伝・第１０章

「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者がその人の敵となるであろう。わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない」

『ヨーロッパを見る視角』P79

ルカ伝・第１４章

「だれでも、父、母、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない」

『ヨーロッパを見る視角』P80

そして阿部氏は語ります

そういう絶対的な命題のようなものを根底においた、そういう宗教は（日本には）なかった、と

『ヨーロッパを見る視角』P80

キリスト教普及：ヨーロッパと日本

ヨーロッパの場合

聖書を自分たちが理解できる範囲内で受け取っていた。

自分たちの社会習慣に合うように書き改めている　：翻訳

日本の場合

聖書を至上のものとして、そのものとして受け入れようとしました。

＊仏教とのちがい

キリスト教は自分たちの文明よりも高い文明に教義を広げたことはない（阿部氏）

キリスト教普及の歴史

カロリング・ルネッサンス８、9 世紀　フランク王国のカール大帝（742～814）

カールの目的は、キリスト教の教義と合致したかたちでフランクの社会を変革していくことにあったと思います。

「西ヨーロッパに関しては、このとき初めて一つの社会の性格を特定の教義、キリスト教の規範に基づいて形成しようとする努力が現れ始めた」ウルマン

『ヨーロッパを見る視角』Ｐ85

キリスト教に基づいて一つの社会の性格を形成しようとカールが考えたとすれば、それはなぜかということになります。古代ローマ地中海文明の力だと思います。ローマ帝国を形成した文化の力の根源に、彼はキリスト教を見て～近代化することが目的であったと思われます。カール以前のフランクの社会が自然のさまざまな力や慣習や経験や伝統や歴史などの働きの中でつくられていたとすれば、カールの提案はキリスト教の教義の権威のもとで社会をつくりあげようとするものでした。キリスト教の教義に基づいて一つの社会をつくろうなどということを本当に考えたとすれば、大変なことです。

社会形成の自然のかたちというものは、ここでは神に由来する規範とか公理、原理に服せしめられることになりました。この点は、その後のヨーロッパの性格を決定的に規定し

たものとして注目すべき点だと思います。

『ヨーロッパを見る視角』P86

世間というものが伝統や血縁や習慣に基づく人間関係であったとすると、カロリング・ルネッサンスが目指していたのはキリスト教の教義に基づく社会ですから、世間とは全く相容れないわけです。つまり、世間的な人間関係を駆逐しない限り、キリスト教は普及できなかったといってもよろしいと思います。世間の中には伝統や慣習に基づく権威がありますから、先ほどのイエスの言葉を使えば、親と子を切り離し、嫁と姑を切り離し、兄弟も切り離して全部自分のもとに結集させるということは、世間というものを全部打破する、解体することを意味しています。

『ヨーロッパを見る視角』P89

個人の覚醒＋個人の支配＝告白

ラテラノ公会議（1215）　告白はすべての成人男女の義務 92

・ヨーロッパの原点　阿部氏、フーコー

「あなたはどこのご出身ですか」ときいたり、「会社はどこですか」「どこの大学をでましたか」「お父さんは何をしていますか」などときくことによって、それを逆に自分が述べることによって、自分はこういう人間ですよということを示す、これはキリスト教以前の過去の人間だ、とフーコーはいっています。　『ヨーロッパを見る視角』P96

「告白は、権力による個人の形成という社会的手段の核心に登場してきたのである。」～国家と腕を組んでいる権力としての教会の前で個人が自分のやったことを告白することによって個人は成立した。つまり、個人を生み出したのは国家であるともいえます。しかし、それは個人が自分の内面を告白せざるをえない状況に追い込まれたことによって、自分の内面を詳しく調べて語ることによって自己というものを形成したのだ、このようにしてヨーロッパの個人は生れたのだ、といっているわけです。

『ヨーロッパを見る視角』P96

告白を通じて、国家、教会の介入のもとで個人が形成されたというのがフーコーの考え方です。告白とは、自分の行為を絶対的な基準に則つて計ることを意味しています。われわれはそういうことを基準にしたことはありません。

『ヨーロッパを見る視角』P97

これは大事なポイントですが、罪というものが絶対的な尺度としてあって、それに基づいて自分の過去を、行ってきたことを調べていくと、浮かび上がってくるネガのようなものが自分だ。そうすると、では反対の部分はどうなるのかということが出てくる。それが今後の問題、つまりヨーロッパが抱えている次の問題になると、私は思います。
私たちの周囲には、そういう基準はありませんでした。われわれの周囲にある基準はどういうものかというと、世間の基準でした。世間の基準に則つて、自分の行為がまわりからどう見られているかを知るということがわれわれの基準です。

『ヨーロッパを見る視角』P97～98

日本の場合は、世間の中で、世間にどう見られるかを予測して、あらかじめそれを避けていくかたちで、世間の中での位置が認証されていく。そういうかたちで浮かび上がってくるのが日本の個人だと思います。

『ヨーロッパを見る視角』P98

このような内容のマニュアルに基づく告白が 1215 年には全ヨーロッパのすべての人の義務になったわけですから、ヨーロッパでは天皇制はこの 11,12 世紀の段階で不可能になったことを意味しているといえるくらいです。一草一木に天皇制があるという祝術的なアニミズムがここでは全部否定されているわけですから、今われわれが暮らしの中で守っているさまざまな儀礼も全部否定されています。　『ヨーロッパを見る視角』P103

・告白の義務に背いた場合は、あの世で地獄にいく。＋罪の代償を（この世で）はらう
（ＥＸ．巡礼・軍隊）

日本：世間による裁き　個人を前提としないために連帯責任の形

国家について

一人一人の彼岸への準備としてこの世があり、そこに国家の役割があるのだという、観念的といえば観念的ですがそういう理解が公式の理解でした。

『ヨーロッパを見る視角』P88

ヨーロッパの中世国家は、基本的には罪の意識の上で形成されてきた～罪の意識というものを原点に据えて国家がつくられてきたといわなければならないと思います。その点が全く日本と異なっているのです。

『ヨーロッパを見る視角』P90

ヨーロッパの国家は、中世から近代にいたるまで、キリスト教の救済史、天地創造から最後の審判にいたるまでの歴史に基づく罪の問題に貫かれているといってもよいでしょう。つまり、アダムとイブの楽園追放以来、人間は罪にまみれていて、神の怒りをかったために支配と被支配の体制が避けられないものになったという考え方です。

『ヨーロッパを見る視角』P90

代理について

聖人たちは、その原則としては社会的な関係をもたず、性的な欲望を一切充足せず、食事も少ししかとらないというかたちで己を世間から切り離していくわけですが、こういう生活態度が結果として社会的評価を高め、聖なる人々として（キリスト教徒から）尊敬されたのです。

『ヨーロッパを見る視角』P111

一般の人々が聖なるものに憧れ、それを実現できた時代はもう終わってしまいました。特定の人々が聖なるものを追及し、その特定の人々が追及した聖なるものへの願いや努力が一般の人々に分け与えられるのだという考え方が出きた。これが中世の代理の考え方です。

『ヨーロッパを見る視角』P112

以下のページでは、キリスト教を理解するためには、性的関係の規制・「聖人」の登場・自画像等、どれも興味深いテーマをとりあげていますが、今回は考察の対象ではないので割愛します。

報告

I

300 余年まえに出版された『統治二論』は私が読んでも古さや違和感はなく特筆すべきはキリスト教徒ではない私にもわかる（？！）とおもわせる、つまり古典とは必然的にこういう条件をもつものなのだと再認識しました。

キリスト教徒ではない私にもわかる（？！）とおもわせる「自然状態」や「政治社会」論の政治哲学や制度設計は平明でかつ明晰な論理展開で理解できました。（たぶん）

またロックは「自然状態」論を書いただけではおそらく歴史上の数多の政治思想家のひとりにすぎないかもしれないが、「政治社会」論によってロックは近代市民政治学の最重要で不可欠の思想家になったと思います。

しかしながら当初、私は『統治二論』の「自然状態」から「政治社会」に移行・飛躍する論理展開に疑問を持ちました。

ロックは彼が発見した（？）【固有権：プロパティ】を守るためには「自然状態」だけでは不備だと考えました。

> 人が、政治的共同体へと結合し、自らを統治の下に置く大きな、そして主たる目的は固有権の保全ということにある。自然状態においては、そのための多くのものが欠けているのである　P 442～

そのために人々が「政治社会」に移行する理由をこう記しました。

> 人々が社会に入る理由は、彼らの固有権を保全することにある。そして、彼らが立法部を選出し、彼らに権威を与える目的は、その社会の全成員の固有権に対する監視役あるいは防壁として、社会の各部分、各成員の権力を制限しその統治権を適度に抑えるための法を作り、規則を定めることにある。P 560

こうして構想されたのが「政治社会」論であり、その影響力や価値は政治思想のみならず現実の政治制度として歴史的事実が証明しています。

私が疑問に感じた、ということよりは考えさせられたもっとも重要なことはロックの構想した「自然状態」「政治社会」を担う個人像にあります。ロックは「政治社会」の制度設計を論理展開するには「自然状態」での＜理性ある個人＞像では不十分だと考えたのでしょう。その難問を解決する方法として「政治社会」の冒頭で＜社会的存在としての個人＞像を新たに造形しました。それは主体的な個人が同意して社会契約を結ぶ、という私たちが教科書で教えられたヨーロッパの市民による社会契約論です。だが、私は『統治二論』を読むことでロックによって描かれた個人像は私のなかの個人像とはまったく＜異質な個人＞なのではないかというショッキングな体験をしました。

私が感じた＜異質な個人＞とはどのようなもので、私とロック、あるいは日本とヨーロッパとではどのように違うのか、を私なりに整理して多少なりとも理解できる方法はないのかと考え選んだのが以前読んだ阿部謹也氏の著作です。

ロックは「自然状態」での人間をこう記しています

> 人間が、すべて、ただ一人の全能で無限の知恵を備えた造物主の作品であり、主権をもつ唯一の主の僕であって、彼の命により、彼の業のためにこの世に送り込まれた存在である以上、神の所有物であり、神の作品であるその人間は、決して他者の欲するままにではなく、神の欲する限りにおいて存続すべく造られている　P 299

> 人間に世界を共有物として与えた神は、また、彼らに、世界を生活の最大の利益と便宜とになるように利用するための理性をも与えた。P 325

圧倒されるほどの神への信仰心、神の作品である理性ある人間への信頼感、そこにロックのキリスト教徒としての強烈な個人倫理を読みとるのはむずかしくはありません。

さらに、「政治社会」論のはじめではこう語っています。

> 神は、人間を次のような被造物に創造された。
> すなわち、神は、「人独りいるは善からず」との判断から、人間を、必要性、便宜、性向という強い拘束の下に置かて社会をなさざるをえないようにされるとともに、社会を存続させ享受させるために、人間に知性と言語とを与えられたのである。　Ｐ３２８

人間は本源的に社会的存在であり、必然的に社会で生活をせざるをえないと断定する姿勢には社会契約論者としての使命感さえ伝わってきます。信仰をもたない私はさらにこう読み解きました。

ロックは、人間は「神の目的」に仕えるべき義務を負って創造された「神の作品」とみなす信念を終生持ち続けた敬虔なクリスチャンだったということを考慮しても、人間の理性は啓蒙（主義）によってうまれるものではなく生来的に持っているものであるという理性ある個人への揺るぎない信頼感は私を圧倒します。また人間は譲ることのできない固有なものをもつ一人ひとり独立した個人として存在していることを教えてくれました。

＜一人ひとり独立した個人＞は民主主義のいろはとして戦後にはじめて多くの日本人は教科書で学びました。しかしながら、学んで知識となったが血肉化はしなかったのです。

> 日本とヨーロッパのどこが違うかを象徴的に示しているのが、社会という言葉がどこまで浸透しているかということにあります。この点については、これまでの社会史学者や社会学者の扱い方には問題があったと思います。社会という概念が日本とヨーロッパと共通だという前提から出発して論じているからです。　『ヨーロッパを見る視角』Ｐ15

> そういう世間と社会との関係は明治の頃から始まっていますが、社会という言葉は文章用語として定着し、インテリ、学者、知識人、マスコミ関係者の間では、文章の中では使われますが、日常会話の中では、演説や講義や新聞記事以外では、まず使われていません。　『ヨーロッパを見る視角』Ｐ25

> 明治１０年（１８７７）に英語のソサイエティが社会という言葉に翻訳され、明治 17 年にインディヴィデュアルが個人という言葉に訳された。
> しかし訳語が出来ても社会の内容も個人の内容も現在（2006 年）にいたるまで全く実質をもたなかった。西欧では個人という言葉が生れてから九世紀もの闘争を経てようやく個人は実質的な権利を手に入れたのである。日本で個人と社会の訳語が出来てもその内容は全く異なったものだった。　『近代化と世間』Ｐ92

阿部氏は同様なことをなんども繰り返し語っています。だが、わたしはロック『統治二論』を読む前まではそれらを知識として読んでいただけなのかもしれません。
そして阿部氏を読むことによって、私が疑問に思った「自然状態」から「政治社会」に移行・飛躍することを人びとが同意して受入れたことを次のように理解しました。

社会的存在の含意――個人は一人ひとり他に譲れない【固有権／プロパティ】を持ち、それを守るために個人は同意して契約を結び社会をつくる――は数世紀の闘争を経て当時の人びとに理解されて共有されていたにちがいないと。そしてそれは歴史的現実として現在にも受け継がれている、と。

＜一人ひとり独立した個人＞意識はその後も個人に固有なものとしてヨーロッパの人々に継承されて「人権宣言」「独立宣言」の理念に、また先進諸国の政治制度に結実しています。のみならず私たちの日本国憲法の中に【固有権／プロパティ】の理念は人権条項に、政治社会の制度設計は国民主権としていきています。日本国憲法押しつけ論者たちは 300 余年の歴史の重さをどう考えているのだろうか。

誤読を懼れずに大胆に言えば、『統治二論』は誠実な個人倫理をもつ個人が、理想的な社会生活を営むために必要な社会倫理論（政治社会論）として書かれたものだ、と信仰をもたない私は読みました。

Ⅱ

『ヨーロッパを見る視角』はヨーロッパと日本の社会を内存的に比較・検討して理解することをテーマに興味深く、注目すべきことが数多く指摘されています。その中でも特にヨーロッパの社会とは異なる日本独特の「世間」についての考察と、「社会」についての十一世紀まではヨーロッパと日本はほぼ同じだったが 12 世紀以降のキリスト教の普及によって大きく異なっていくことの歴史的な展開は、カロリング・ルネッサンスの記述を含めて刺激です。

しかし、今回私が論点として考えてみたいと思ったことはヨーロッパと日本の個人（像）です。

私は『統治二論』を読むことでロックによって描かれた個人像は、私のなかの個人像とはまったく＜異質な個人＞なのではないかというショッキングな体験をした、と書きました。そして私はロック『統治二論』の個人像に、表記は同じでも日本人が教科書で習った個人とは異なる数世紀の闘争を経て内実化した社会的存在としての＜一人ひとり独立した個人＞を読み取りました。

他方阿部氏は「世間」と「社会」の関係、あるいは「世間」と「人間」の関係というように関係性の中で個人を考察してきました。

- 日本は「世間」という独特な人間関係が支配的であったし現在でもある。
- 明治 17 年まで個人という言葉も意識もなかった、つまり個人は存在しなかった。
- 日本人は個人の尊厳がない「社畜」
- 現在も世間の枠の中で自己を主張できない。
- ヨーロッパは個人は九世紀もの闘争を経て実質的な権利を手に入れた。
- 日本はダブルスタンダードの近代化（社会と世間）が今も続いている。

> 日本においては個人と「世間」との関係の中にさまざまな問題の原点が隠されており、民主主義を実現しようとすれば、少なくとも個人が「世間」から自立しなければならないことは明らかである。そういう場合の民主主義とは欧米流の民主主義であるが、私たちはそれにこだわる必要もない。欧米においては個人に軸足を置いて物事が判断されてきた。しかし日本人は個人の行為を「世間」の中で判断しており、そのかぎりで私たちの先祖は自然の中での個人の行為を重視していた。　　『近代化と世間』P 120

欧米では個人に軸足を置いて、日本人は世間のなかで物事を判断する、と語っています。もちろんその考えに異論はありませんが、平成 24 年の日本では「世間」という環境は昭和時代ほど強固なものではなくなってきているのではないだろうか、しかし日本人の個人の意識は依然として変らないのではないか、というのが私の考えです。

> 日本人はどうしても日本人同士で固まってしまう。その理由の一つは、言葉が不自由だということがあります。言葉が不自由と言っても留学生ですからそれほどではないのですが、基本的にはドイツ人やフランス人やアメリカ人と一緒に共通の話題で話に興ずることが非常に苦手です。～要するに、外国人の中で一人になることに対するすごい不安が日本人にはあるのです。それは前回お話した世間の構造と非常に深い関係をもっています。
>
> 『ヨーロッパを見る視角』P６２

このような海外での日本人のエピソードについては、阿部氏に限らず多くの評論家たちが同様なことを言っています。阿部氏は当然世間の構造との関係で、外国人の中で日本人は固まってしまうと語っています。しかし私はロックの個人に触発されて、そして阿部氏の「世間論」を再読した結果、その見解とは少々異なります。

日本人同士で固まってしまう、一人になることへの不安は、私は言葉が不自由だ、海外に居る、外国人の中にいるということではなく、日本に居ても、日本人の中でも同じ心理が働くと思います。それは＜日本人という同質＞の中から排除されることに対する不安であり、

恐れだからではないでしょうか。
私が感じた＜異質な個人＞を比較して言えば、ロックの場合は＜理性ある一人ひとり独立した個人＞ですが、わたしの個人は＜日本人という同質の中の個人＞ということです。
（ことわっておきますが、これは価値の優劣を言っているのではありません。）

> 「世間」の中には共通の時間意識が流れている。日本人の挨拶に「今後ともよろしくお願いします」という挨拶があるが、これは日本特有のものであって、欧米にはそれに当たる挨拶はない。なぜなら日本人は「世間」という共通の時間の中で生きているので、初対面の人でも何時かまた会う機会があると思っている。しかし欧米の人は一人一人の時間を生きているので、そのような共通の時間意識はない。
>
> さすがに、明治の初期の人々は鋭い視点をもっていたと思います。
>
> 「世間」の中で生きている日本人と「世間」をもたない欧米人との間にはこれだけの違いがある。　P99

阿部謹也『ヨーロッパを見る視角』や『近代化と世間』等一連の「世間論」はヨーロッパと日本の「世間」と「社会」、「個人」の比較・検討で、ひとつの「日本」文化論と言えます。今回再読して新たにわかったことは、多くの凡庸な評論家・学者が書く日本人が大好きな日本論と阿部氏の著作を峻別している彼の声低くしかし強固な意図が感じられるメッセージでした。それは、凡庸な評論家・学者の日本論に無意識に書いている「日本人」という表現を注意深く、かつ作為的に使用していることです。
深い見識と理性の人阿部氏は、日本特有の「世間」論を考察しながも「個人は日本人ではない、国民ではない。」と通低音のように語っています。

（余談ですが）日本人はロックやマルクスのように壮大なフィクッションを構想、構築できるでしょうか？たぶんできないだろうし、必要ともしないだろう。なぜならば、私たちは一人ひとりの個人ではなく＜日本人という同質の中の個人＞として生きているから。
では、どうすれば可能になるだろうか？
それは私たちが日常用語として使っている「国民」や「日本人」を意識化することが先ず第一歩ではないでしょうか。

以上